

戦後占領期における性感染症

—GHQ/SCAP文書にみる軟性下疳の流行—

田中 誠二¹⁾, 杉田 聡²⁾, 丸井 英二¹⁾¹⁾順天堂大学医学部公衆衛生学教室, ²⁾大分大学医学部看護学科

【背景】 われわれは、国立国会図書館憲政資料室に所蔵されているGHQ/SCAP文書のうちWeekly Bulletinに付録として記載された感染症統計を整理・復刻し、戦後占領期における感染症流行の実態解明を目指している（その成果の一部を「占領期における急性感染症の発生推移」日本医史学雑誌2007; 53(2): 229-248にまとめた）。現在は、新たな課題として性病統計の復刻・分析作業に着手しており、昨年の第111回本学会総会（水戸）では性病統計の概要と「梅毒」の発生推移を、また、第69回日本公衆衛生学会総会（東京）では「淋病」の発生推移を検討し報告した。本報告では3つ目の疾患として「軟性下疳」に着目し流行の実態を考察する。なお、昨年の報告と同様に、本報告では「性病」という呼称を用いることとする（現在は一般的に「性感染症」(Sexually transmitted disease (STD), またはSexually transmitted infection (STI))と称されるが、本研究で扱う資料の記載が“VENEREAL DISEASE”となっていることや1948(昭23)年に「性病予防法」が制定された背景などを考慮した）。

【本報告の目的】 本報告では、GHQ/SCAP/PHW（連合国最高司令官総司令部公衆衛生福祉局）が収集した性病統計のうち軟性下疳（CHANCROID）の発生推移を地域別に把握し、その広がりの特徴を明らかにすることを目的とする。

【方法と材料】 GHQ/SCAP文書のうちWeekly Bulletinに付録として記載された性病の患者数記録（都道府県別・月別／週別）を電子ファイル化した。なお、1946年1月から3月については、PHW内の人口統計課（Health Statistics Branch）史料に独立して存在した記録を同様に電子ファイル化した。分析にあたっては「月別」の罹患率をグラフ化した。「月別」の記録が確認できない場合は、「週別」記録を月毎にまとめた後、当時の都道府県別人口を用いて罹患率を算出した。

【結果と考察】 1) 全国における軟性下疳の発生推移をグラフ化すると1946年1月から時間の経過とともに上昇し、1947年になると罹患率は人口10万対40~65の範囲内で増減を繰り返した。1948年に入ると全期間を通して最も高い罹患率を示した3月（人口10万対75.0）を頂点とする山を描き、同年夏以降は緩やかに減少する推移を辿った。2) 地方別に見ると全体を通して近畿地方で罹患率が高く、東北地方で低かった。全国的にピークを迎える1948年の春に最も高い罹患率を示したのは中部地方であり、これを県別にみると愛知県の激増が大きく寄与していることがわかった（愛知県：3月、人口10万対436.5）。

これまでに梅毒と淋病の発生推移を明らかにしたが、今回検討した軟性下疳も含めこれら3種のグラフは非常によく似た形状を示した。いずれも1948年春に罹患率が最も高くなる点や1946~1947年における増減のタイミングが一致している点からも、性病流行の実態そのものと即断するのではなく、背後にあった出来事（例えば、占領軍による患者報告システムの強化がなかったか）との関係性を疑いながら検証を進めることが不可欠である。今後の課題として引き続き研究に取り組む所存である。

本研究は、日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)「占領期の保健医療政策に関する考察 GHQ文書内の相互リンク化による検証」(研究代表者: 杉田聡/研究分担者: 田中誠二)の成果の一部である。